

# 民家の生活文化史

## ——赤城型民家の時代と社会——

高 橋 敏

- 
- |                |               |
|----------------|---------------|
| はじめに           | 3. 消費社会の成立と発展 |
| 1. 赤城型民家の成立    | おわりに          |
| 2. 赤城型民家の時代と社会 |               |
- 

### 論文要旨

「民衆の生活文化史」はどこでも安易に使われる耳慣れた研究テーマである。ところがその中身は、となると、抽象性が前面に出て空疎な民衆・人民概念が横行するのが、残念ながら戦後歴史学の実態ではなかつたろうか。

生活文化史を主唱するならば、まず「民衆」を抽象性から解放すべきであろう。歴史創造の主体である民衆はもちろん生身の人間であることを確認すべきである。これらは、支配・被支配の国家論を越えて実在するのである。ひとまず、衣食住という狭義の生活史一例をとってみても、文献史学は長くこれを苦手としてきた。また、これを誇りとするような自己欺瞞の中にいた。民衆の衣食住は、何か文化の底流であり、歴史をリードすることと無縁なものと考えられていた。

抽象性に満ちた民衆万能の人民觀と文化無縁の民衆觀に挾撃されて、生活文化史は停滞してきたように思われる。

これらを克服するためには、生活文化史概念のゆるやかな検討をくりかえしやらなくてはならない。この作業と同時進行して史料論の一新が図られねばならない。

そして、文献史学からの生活文化史へのこだわりのうえに関連諸科学、考古学、民俗学等との学際的研究が行われねばならないであろう。

このためには、まず、地域史での生活文化史のフィールドワークが積み重ねられていく必要があるのである。

本稿は、上州赤城山麓の村々をフィールドに18世紀後半～19世紀前半にかけて起こった生活文化史上の変革を追求する。

赤城型民家というこの地域特有の住居に凝集されてくる民衆の生活文化の実態を文献史料の見直しを通して、またこれに近世考古学、民具学の成果を援用しつつ、具体相をもって明らかにしたいと思う。